各期同期会のトピック・エピソード

菅沼龍夫君の講演

間もなく総会開始の会場

■高19回

本年度飯田高校同窓会総会は、高19回卒（一九会）が運営当番となり、6月21日飯田市内のシルクホテルで開催されました。一九会からは首都圏からの30名など約１００名が参加し、総数２７０名の参加者最多記録を更新するなど、盛会裡に終えることができました。今年度総会はテーマを「和」と定めましたが、それに相応しい和やかな総会、懇談会となりました。役員改選など全議案とも異議なく了承され、引き続き宮崎大学学長の菅沼龍夫君（高19回卒）の記念講演が行われました。天孫降臨の神話の地、高千穂峰など宮崎県の紹介ビデオの後、宮崎大学による地方創生、大学改革などのお話の中で、宮崎牛一頭丸ごとＣＴスキャンして肉質の診断をする動画は、大変興味深いものでした。

また全国一位になった飯田高校邦楽班の演奏は、まさしくテーマの「和」にかなった見事な調べで、阿島傘と打掛が飾られた懇親会場は人で溢れ返り、胸に金銀の水引細工を着用した一九会の面々が、旧交を温めあう姿が印象的でした。高20回卒への引継ぎを経て、お開きとなりましたが、一九会は引き続き同会場で二次会を、また三々五々有志で三次会へ繰り出しました。

一九会は前日のゴルフコンペもさることながら翌日の摺古木山登山もきついものがありました。

8月下旬の赤石岳登山とこの総会の模様は同窓会ＨＰの「高19回」に掲載しています。

（平成二十七年度定期総会実行委員長新井雄三記）

二次会での記念撮影

ゴルフコンペの表彰式

摺古木山登山

■中39回

私は神稲村から天竜川にそって田圃道を通り、明神橋を渡り、市田駅から飯田線で上郷駅まで五年間通った。雨の日風の日も雪の日もみんな元気に通学した。飯田線には飯島、大島、山吹等から集まってくる同級生と挨拶して通学した。これが中学生活の始まりだった。

中学四年生頃、七月下旬の学校行事で勤労作業を村の会館に宿泊して2～3日行った。作業は上郷村野底山の斜面に植えた桧の苗の下草刈であった。暑い真夏の太陽を浴びながら汗を流し暑さと疲れであやまって苗の頭を切り落とし見廻りの管理人に叱られたことがあった。

夜は生徒は二階、先生（長沢茂久太先生）等は一階に宿泊していた。夜の消灯後の二階は解放された気分で流行歌等を歌って騒いだ。階下から長沢先生が上がってきて〝黄色の声で歌っているのは誰だ〟〝静かに眠れ〟と叱られた。

中学卒業後、私は米沢商工へ入学、夏休みに故郷へ帰る途中、中央線上諏訪で下車して諏訪中学に転じた吉沢治作先生を訪ねた。四年生の担任で先生には色々お世話になったので、米沢生活を報告した。

商工卒業後昭和電工（K.K）川崎工場に勤務、テキサコ工場、アンモニア合成工場の管理者として多くの先輩後輩と親しく過ごした約四十年余、夢のように働いて来たことを感謝している。

現在昭和電工のOB会で飯田高校出身、佐々木康夫（高15回）君、岩崎廣和（高22回）君とは会えば伊那谷や飯田市の様子を語り合えることを幸せに思っている。

〝我が人生に悔いは無い〟

（片桐功夫記）

■中43回

今年米寿の飯中在京会は、平成二七年四月一六日、僅か五名の出席で始められた。かつては五十名を越える青壮年時代を考えるとまさに隔世の感がある。その間創立から四十年以上にわたる会の運営に尽力された、常任幹事久保田昭夫君（弁護士平成十八年七月没）の存在抜きには考えられない。

飯中入学（昭和一四）以来四分の三世紀に亘る思い出話は尽きることがなかった。今回出席の五名は、終戦時（昭和二十年八月一五日）はどうしていたか。

小笠原皓介　理工系学生・徴兵猶予中

後藤　正　右に同じ

寺沢和美　海軍兵学校在学中

稲垣隆俊　陸軍士官学校在学中

小笠原正教　徴兵年齢引き下げで最後の徴兵・入隊中

ご覧のように六割が軍人である。私達の中学五年間はまさに戦時体制下だった。入学の二年前に盧溝橋事件が勃発、翌年国家総動員法施行、入学の昭和十四年四月ノモンハン事件、九月第二次世界大戦勃発、そして三年生の昭和十六年十二月大東亜戦争突入である。敗戦の昭和二十年八月は卒業後一年半、各人呆然自失ながら夫々の人生設計の真只中であった。

私達前後の米寿時代は、戦

中戦後を実体験で語れる最後の年代だが、やがてこの年代はなくなってゆく。

明治時代から、数え年二十歳になると徴兵検査を受け兵役を義務付けられていたが、私達が中学に入学した年には、軍需工場要員にも徴用義務を課す国民徴用令が制定され、更にこの年食糧不足に対して米穀配給統制法が制定され、国民は戦後まで食糧不足に苦しんだ。中学三年の日米開戦から陸海軍進学勧誘が盛んになり、配属将校は勿論、校長まで半ば強制的に軍関係への進学を迫った。

中学五年（昭和十八年）の秋には、かの有名な学徒出陣があった。それまで学生は徴兵猶予となっていたが、文科系学生はその猶予が停止され、数え年二十歳以上は徴兵された。当初私達同級生は一五〇余名、中学卒業の昭和十九年三月時点ではその約二割ほどが軍関係に進学、あるいは就業していた。その後徴兵年齢が数え年十九歳になり、終戦直前私達の多くが徴兵された。最後の徴兵となった。犠牲者も出た。予科練に入った山田哲也君は、昭和十八年六月戦艦陸奥の爆沈で殉職、享年十六歳。徴兵年齢引き下げで終戦直前の七月一日徴兵の後藤恒次君は、横須賀高射砲隊に入隊して間もなくB29の猛爆で戦死。享年十八歳。其の他にも犠牲者が出た。徴兵実戦を体験した最後の年代となった。飯中四十三回は、いつも環境変化の激しかった戦中戦後を体験し、人生を回顧して話の尽きることはない。

しかし、待ってくれないのは年齢相応の体力老化である。体力のついていけない友が増えている。従って来年の在京会は、今年同様年賀状の開催希望を見てから決めることにしたい。

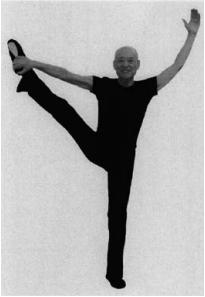
（稲垣・小笠原正教記）

■中45回

飯中四十五期会は、卒業以来（四年で繰り上げ卒業）七十年の節目になるので、本年はぜひとも、同期会の開催をと念じ、幹事と協議した結果、皆さん、いろいろな事情で日常生活に難渋をしている様子なので、同期会開催はしないことと決めました。

戦後、我国は世界でも稀にみる、自由、平和、豊かな国家として繁栄してきた。日本人として大きな誇りを持って過ごしてこれた。

今次の戦争で、私の兄三人が戦死等で犠牲になった。だから、戦争の悲劇をいやという程身をもって体験しているので、将来にわたり絶対に戦争はしてはならないとの強い思いを抱いている。



年老いた今は亡き、母親の心中を察するとき、悲嘆、苦痛はいかばかりであったろう。筆舌に尽くし難い程に大きく深いものであったろうと、思い浮かべるたびに、とどまることなく涙が込み上げ溢れてくる。

当たり前のように享受している平和の有難味は、尊い命をお国のために捧げた方々のお蔭であることに、深く感謝し日々鎮魂の祈りをこめ、笑顔で健康年齢の向上につとめながら過ごしているのです。

（福澤盛吉記）

■中47回・高1回

高年齢相応の身体不調は仕方がない。四七会飯田本部の恒例の一泊新年会も、遂に本年から新緑五月の開催に変更し、今宮半平での昼食会となった。参加者17名と9名の欠席者、それぞれのコメントを全文収めて、立派な近況報告集にして配布してくれた事務局鈴木藤雄君に感謝と拍手をおくる。

東京四七会では旧来の四月第一土曜開催を固守しているが、参加者は今回はじめて遂に30名を割った。しかしここ三年連続でアトラクションに講談師神門女史を招いて好評である。今回の演題は古典名作『赤垣源蔵徳利の別れ』と新作『飯田中学校の校歌由来ものがたり』の熱演で大喝采を受けた。

神門久子女史は中46回・山岸忠彦画伯（富山県高岡市在住）の長女。彼女の活躍ぶりはネット参照。男女共学は無縁だった我々に校歌合唱まで紅一点で同席してくれる心強い助っ人だ。今年の当番幹事は濱次雄、平田達、矢澤西二、米山和夫。（牧内雪彦記）

■中48回・高2回

高校2期・中学48期の同期会は、毎年、春に東京で、秋に飯田での2回行われている。若い頃は、両方の同期会に出席する人がかなりいたが、齢80を超えてからは、両方への出席者はほんの数人となっている。同期会出欠の返信はがきには、メッセージを記載する欄があり、近況のほかに、思い出、心情、政治への不満などが、活発に、はがきのメッセージ面の全面に寄せられる。一方、体調不良や遠方の理由で、出席できない無念さをひしひしと述べているのが、年々増えてきているのは寂しいことである。

東京での同期会は、今年も、例年通り4月の第1土曜日に、桜で賑わう市ヶ谷堤の横、アルカディア市ヶ谷で開催された。出席者は24名で、昨年より2名多かった。歩行困難などで欠席していたのが、会えるうちに会っておかねばと、気を取り直して参加したのが増えた理由だった。

懇親会は、喜久水酒造の銘酒「大吟醸・翠嶂」も出回り、和気藹々、盛り上がった。その間を縫って、会場に設けられた金屏風の前に立っての、各自の思い思いのメッセージも、気概に溢れたものが多く、老いを感じさせないものであった。

今年は、戦後70年の節目の年とも、東京大空襲後70年の節目の年ともいわれる。同期生の中には、戦時中、疎開で東京から飯田へ移って来た人もかなりいて、その受け止め方はそれぞれ違っていると思うが、中学、高校と、戦中、戦後の激動の時代を一緒に過ごした仲である。気脈が通じ

るというか、近頃の世情に対する不満なども含め、話は尽きなかったが、最後に来年の幹事を決め、再会を期して散会となった。

なお、平成28年度の幹事は、久保田健、斉藤進、林健久にお願いし、恒例により平成28年4月2日（土）アルカディア市ヶ谷で同期会を開催することに決まっている。

（北原恒扶記）

■高4回

〈皐月の風は
〈皆に力とやさしさを
〈与えて去っていく―

何もしないンの会は、一回も休むことなく回を重ねて、今年で52回になりました。

今回（5月23日）43名もの仲間が集って開催できたことは大変嬉しい驚きでした。

今まで、40回（平成15年）72名が最も多い人数でした。

昨年で全員が「ハナタレ小僧」の年代を終えて、八〇歳の「男盛り」の年代になりました。

ただ残念なことに13名の同期生がいなくなりました。

でもこの27会に関しては、まだまだ、これからこれからの意気込みで、回を重ねて行って欲しいと願っています。

〈事務局からのお願い〉

毎年の27会の例会は5月第3土曜日でしたが、会場の都合で今年から5月の第4土曜日に変更しました。従って来年は**平成28年5月28日（第4土曜日）午後1時から**、新宿サンパーク（7F）4テーブル、イス席で開催します。

（福澤富夫記）

■高5回

高校5回の首都圏同期会は6月5日、文京区湯島のガーデンパレス東京で行われた。

参集するもの27名。

このところ数年毎回出席の常連が相次いで鬼籍に入り、人数の減少するのはやむを得ない。

開会に先立ち元日刊スポーツ写真部長谷口明君の撮影で集合写真を撮影。

会は井口卓二君の司会で、代表幹事小笠原啓峰君の開会宣言と挨拶、物故者に黙祷を捧げて宴会に入った。

途中のスピーチで、今我々にもっとも必要なのは、キョウイクとキョウヨウである。つまり今日行くところがあるか、今日用事があるかであるとの中島満三君の話が大うけだった。

井上侯尉君（ダイワの役員経験者）の釣竿についての薀蓄にあふれる講話も好評だった。

嵯峨座君は「釣り竿をオショッテしまった」など飯田弁丸出しで補足した。

宴の終わりは恒例により校歌・応援歌・さらに「ふるさと」の合唱と手締めであった。二次会は席を変えて行われこれまた大盛況だった。

卒業以来62年、われら斉しく老いたりといえど、あの高松台の3年の春秋の記憶は青春の息吹を今日まで脈々と流れ続けていることを確かめ合った有意義な一日であった。

（久保田實記）

■高7回

高校7回卒業生は、『卒業60周年記念大会』を10月に飯田市追手町・三宜亭で開催するため「在郷高七会」（小林泉会長、会員：55名）を中心に、「首都圏高七会」（西村清一会長、会員95名）及び「中京地区高七回」（朝比久雄会長、会員30名）が協力して準備を進めている。

飯田高松高校を昭和30年（1955年）に卒業して以来、節目の「25周年」、「30周年」、「40周年」、「50周年」、「55周年」と記念大会を開催し、その都度記念誌を発行してきた。今回も「60周年記念誌」を発行する。

また、併せて「第33回高七展」を開催する。「高七展」は、昭和58年（1983年）に、絵画、書、写真、陶芸などを集めた展示会を開催してから、ほぼ毎年開いてきている。今まで主として飯田市の中電ショールームで開催し、東京でも3回開催している。今回は10月20日から25日まで「飯田美術博物館・市民ギャラリー」での開催。

同期の桜が、洋画・日本画・書道・篆刻・写真・陶芸・紙細工・竹細工・詩歌その他の作品を出品。プロ・アマがこんなに長く、バラエティーに富んだ展示を続けていることは、他にあまり類を見ないのではないだろうか。

（金田明夫記）

■高8回

第39回八松会関東支部総会を6月3日（水）アルカディア市ヶ谷で開催。

参加者24名、内女性2名。塩沢満憶君は遠路飯田から参加してくれた。

司会・進行を中田加津三君が担当。

開会挨拶：羽場良和　会長
黙祷：関東支部会の役員として活躍された大澤武文君、ゴルフ会等で大変お世話になった田中正史君の訃報に接し皆驚いた。久保田善人君の発声で、御冥福を祈って黙祷を捧げた。
会計報告：川上政司君
会計監査報告：加藤毅君
欠席者の近況報告：飛田明美さん
懇親会：内藤良太君の音頭で乾杯。

久し振りに会った同級生、肩を叩きあって「久し振り！オー元気か！」と交歓。恩師、水泳、ラグビー、コンパ、仮装行列など高松時代の話題に花が咲いた。

校歌斉唱：指揮　木下喨平君
～赤石山は巍々として…～
声高らかに斉唱。

閉会挨拶：秦初博

来年また皆元気でお会い出来ることを祈念して「よ～おっ　ポン」の一本締めで閉会。記念写真を撮って散会。明年は八松会40回、飯高卒業60周年を迎える。

2次会を2階レストランで開催、希望者参加。

会員の近況：歳相応に体調不十分の方が多くなってきているが、未だ専門分野で活躍される方、海外旅行、ゴルフ、呑んで歌う会を楽しむ方、絵画で日展など入賞、狛犬研究、蝶々採取など趣味の分野で活躍など、まだまだ頑張っている。

（秦初博記）

■高9回

高9回卒首都圏同期会は6月15日(月)午後1時から市ヶ谷のアルカディアで開催しました。出席者は女子5名を含む27名。

平成24年から出身地区をグループに分けて、同期会の幹事を受け持つことになり、今回は鼎、松尾、竜丘、竜江、

千代の5区8名が林友実幹事長の下で担当しました。

会は吉田多枝子さんの司会で進められました。今年は多くの同期生が喜寿を迎える年でもあり、話題もおめでたい話、つらい話など賑やかな一刻を過ごすことができました。しかし、幹事より酒井繁行さんの急逝（5月30日）が報告されると、一同沈黙。

塚田正敬さんより故人の思い出が述べられ、また、酒井さんより詩吟の指導を受けられた塚田正敬さん、廣瀬幸雄さん、湯田直一さん、細田和子さんによる吟詠は一同心に響くものがありました。

原俊夫さんによる乾杯のあと、懇談会に入り、飯田から参加された片桐晴夫さんより母校の同窓会総会の報告がありました。

司会者の指名を受け、代田勝人さん、岩口功さん、宮内みはるさん、富田玲子さん、西井幸子さんの皆さんよりそれぞれの近況をお話しされました。

余興では酒井さんを偲ぶ吟詠のほか、太極拳を白い揃いの装束を纏って桜井勝実さん、荒井綏さん、林友実さんで簡化24式を演じました。尺八は中川雄之介さん、フルートは片桐晴夫さんによるいずれも心に沁みる演奏でした。

今回も予め投稿された川柳56句を、金田弘道さんの仕切りで出席者による投票の結果、第1位は大平重臣さんの句が選ばれました。

「軽々に　もの言う似合いの　喜寿の帯」。尚、お題は「携帯電話」です。

岩口功さんの指揮で校歌斉唱。次回幹事を旧飯田市の皆さんにお引き受け戴き、盛況裡に終了することができました。（幹事　林友実、広瀬幸雄、北田武司、鎌田利定、丸山利夫、吉川喜八、吉田多枝子　萩元厚生〈記〉）

■高10回

平成二十七年の十松会は、会場を南青山会館から、五反田のゆうぽうとに変更して開催されたが、年々出席者が減り今年はとうとう三十名を切ってしまった。

百二十名宛て案内状を送付したが、出席予定者二十五名　欠席者が七十二名　音信不通者が二十三名であった。

集いはまず、出席者全員の記念撮影がおこなわれたが、中々全員が揃わず、撮り直しが三回にわたった。集いは海外経験豊富な又小学一年生を二回在学したM君の乾杯の音頭で始まり、今年は懇親の度合いが深まり宴会一部の〆は飯田高校の校歌を合唱した。

宴会二部はカラオケでそれぞれのののどをきそい、最後に信濃の国を五番まで合唱してお開きとなった。

（光澤武記）

■高12回

第3回華齢なる音楽祭で飯田へ

わが同期会が中心になって飯田鼎文化センターで開催してきた「華齢なる音楽祭」が今年は3回目を迎え、9月20日の開催日には、在京同期会からも「華齢なる合唱団」が乗り込むことになっています。

前回は同期会の55周年事業と共催となり大盛会でしたが、今年はさらに県外からの出演や、趣旨に賛同した歌手・大庭照子さんの参加などが決まり、5月31日に飯田文化会館で行われた「飯田シルバーコーラスかざこし」25周年記

念コンサートの祝賀慰労会の席でも、大いに話題になっていました。

同音楽祭は60歳以上の熟年世代を参加資格として、合唱、マリンバ、リコーダー、ハーモニカ、大正琴、三味線、フォーク、フラダンスなどあらゆるジャンルの音楽愛好家が集い、前回は17組が参加しました。

在京同期会の「華齢なる合唱団」は飯田同期会の協力も得て、大庭照子さんの持ち歌「小さな木の実」、ドラマ「坂の上の雲」の主題歌「Stand Alone」などを歌います。大庭さんは「この歌の男声合唱は聞いたことがないので大変期待しています」と話し、高齢者の生き方でベストセラーを書いている千葉大学名誉教授・多湖輝氏は「これほど多彩な〝華齢〟な音楽があるのかと驚き、ぜひ全国的に広めてほしい」と言葉を寄せています。

さて仕上げの程はいかがでしょうか。ぜひ多くの人にお聞きいただけますよう……。

（福島茂喜記）

■高14回

「古稀の記念祝賀会」

2013年10月17～18日　八重洲ホテル

少し旧聞に属しますが、全国から（USAからも）89名の参加（物故者48名、総会員は約340名）があり大盛会でした。50余年ぶりで会う者も多く、名札で互いを確認しながら、思い出話に花を咲かせました。歌謡ショー、校歌・応援歌などで大賑わい、参加者に大変喜んでいただき、実行委員は積もった苦労を忘れました。

「石田瑞穂さん　瑞宝小綬章のお祝い」　2014年9月2日　レストランアラスカ

有志31名が石田さんの受章のお祝いに集まった。彼女はこれまでにも数々の栄誉を受けており、我われ14回生の誉れである。現在もなお筑波の活断層・地震研究センターで活躍されている。

「恒例の忘年会」2014年12月2日　東京駅ビル内オールドステーション

いつものクルーズクルーズが建替えのために、交通の便の良い所で開催した。在京42名の参加があり、いつもながら元気組は更に二次会にて盛り上がった。毎年、元気で再会を果たしたいものである。

（林泰記）

■高16回

早いもので70歳古希を迎えます。還暦の大会を京都で実施し、再度古希大会を企画してます。7月19日（日）～20日（月）ホテルで式典・宴会。翌朝は、記念樹を見ながら〝智積院〟で……。このようなイベントは最後になるだろうとの観測・意見もある。修学旅行が飯田高校ではなかったとはいえ、京都で2回も!?　いや、前回は予行演習までやったから3回か、好きだねえー。

在京の同窓会は、年3回程開催し、いつも20名近い出席者。高校の集まりがきっかけになり追手町小学校の同級会までやってます。こちらは、始まってから5、6年、年に3回程で1泊2日の旅行も。

新宿で在関東のメンバーを主にして。

飯田方面は、月に1回無尽（頼母子講）を。継続は力なりで結束が固く、生活に根付いています。ふりかえってそしてこれからも、世話役の幹事にかんじんです。有難う有難う。

（奥村方敏記）

■高17回

まさに「紅葉の昼神の湯に集いたりともに語らんこの50年」、わが17回の「卒業50周年記念事業」が、平成26年10月19日～20日、昼神温泉郷のホテル阿智川にて128名の仲間が出席し盛大に開催された。

今回の50周年記念事業は、実行委員長の宮澤豊司君、事務局長の平沢忠明君を中心に「広げよう17回の輪」のもと、飯田在住に加え在京など多くの仲間が実行委員として参画し、昨年春より周到な準備が進められた。

記念事業の内容としては、まず初日19日の式典、開会の挨拶、物故者追悼、実行委員長挨拶等に続いて母校への寄付金贈呈（170余名の協賛）。さらに羽生郁久君、大澤正子さん、斎藤憲君によりそれぞれ、医師としての体験、親の介護の体験、中国での大学滞在の経験について、ミニ講演があった。いずれも身につまされるまた熱のこもった内容で、多くの仲間が共感を覚えた。また、会場には絵画、写真、彫刻・工作物など趣味を生かした作品が展示され会場の雰囲気を和ませた。

全員の記念写真に続き祝賀会。中村毅君の乾杯が終わるやたちまち50年前にタイムスリップ。有志による男女混声のコーラスのアトラクションもあり、話は弾んで盛り上がりは最高潮。

翌20日は、4つのコースに分かれて気の合った仲間のイベント。①郷土の自然コース（参加者6名）、②郷土の文化コース（同28名）、③母校の歴史コース（同15名）、④ゴルフコース（同19名）で、改めて郷土の歴史文化を確認した。また、女子については、この後さらにレストラン「樹里」に20名が集まり、「困難もパワーに変えて前進す笑みのあふれる古（いにしえ）乙女」であった。

なお、内容の充実した素晴らしい労作である「記念誌」、「事業報告・写真集」が本記念事業の成功と非常に意義深いものであったことを示している。改めて、実行委員長はじめ関係委員の仲間に厚く感謝したい。

（脇坂英文記）

■高18回

私が今のマンション（130戸・約400名余）に移り住んでから既に15年経ちますが、日常的に交流を持つ人々はいまだ20名にも及びません。

これに対して、私達が半世紀前に高松台で共に過ごした期間はわずか3年間にすぎませんが、同郷・同窓・同期・同級……という絆は本当に深く強いものです。

私達高18回卒の首都圏在住者有志は、奇数月には飲み会・偶数月にはゴルフ会という形で毎月集まって楽しんでおります。

こうした定例会の他、昨年9月には希望者による菱田春草展の合同鑑賞会を行い、故郷の誇る大家の名作を堪能しました。

現在の名簿登録者は33名、飲み会の出席者は15～20名ですが、ゴルフ会の方は最近腰痛等による〝故障者リスト入り〟が増え、いささか参加者が減少気味なのが気がかりです。

〝古希〟も間近い私達ですが、いつまでも元気でこの会を続けていきたいものと思います。

首都圏在住で新たに参加ご希望の方がおられましたら、気軽に幹事までご連絡ください。

◇飲み会幹事
F組 野原恒夫
nohara86@i5.dion.ne.jp
◇ゴルフ会幹事
G組 伊原厚司
ur4a23@bma.biglobe.ne.jp

（野原恒夫記）

■高22回

旅嫌いを世界行脚に引き込んだ『人形劇』

人形劇の仕事を始めて、気づいたら40年が経っていました！

私の仕事は人形劇の制作（横文字で言えばプロデュース）です。具体的には飯田の人形劇フェスティバルの協力、欧米の人形劇の紹介、乙女文楽の公演、などです。

欧米の人形劇の紹介は、まず現地に行って人形劇を観て、面白いなと思った劇団を日本に招聘し、日本で公演を引き受けてくれる自治体や団体を探して売り込む（つまり営業です）、というものです。お蔭で旅嫌いの私が、ヨーロッパはほとんどの国に行き、国内に至っては全県を踏破しました！

人形劇の魅力は、生命を持たない〝モノ〟である『人形』が舞台で演じる面白さです。人間の演じる舞台と違った『乾いた感じ』が魅力です。特に最近の欧米では、人形、物体、ダンス、マイム、映像などが混然一体となった、新しい作品が生まれています。まだまだ進化する芸術分野だと期待をしています。

（松澤文子記）

■高26回

「風夢の会」

二月の飯田の本会は十五年、十一月の東京の首都圏会は五年以上毎年開催しています。三年前から始めた「南アルプス・仙丈岳登山」も定期化され、飯田・東京双方からの参加者で九月に開催されました。

八月には、南アの予備登山を兼ねて「高尾山登山」を行いました。毎日真夏日が続いた時期でしたが、「六号路」の沢沿いに登るコースは、木陰も多く沢からの風が気持ちのよい登山道でした。持参し

た野菜・フルーツやインスタントラーメンとともに、山頂近くで飲んだビールは最高でした。

今年は、会員の多くが還暦を迎えます。飯田の本会と合同で「還暦登山」を計画中です。飯伊では中学二年の時全員が登った、中央アルプスの西駒ヶ岳（木曽駒ヶ岳）へ挑戦する予定です。

（宮島敏彦記）

■高28回

もしも過去に戻ることが出来たならば、『高校時代』に戻りたい――、これはある友が語った言葉だ。同じ思いを抱いていた同期生も、少なからずいるに違いない。

一昨年は「還暦同窓会」の幹事を拝命して、在京の同期生が十数名集まった。半数以上は在学中には接点がない初対面同然のメンバーだったが、同じ目標に向かって取り組むことで絆が生まれた。不明だった在京同期生の所在がわかり、昨年は五～七人の少人数だったが、何回か集まり食事会をした。

今年は上半期だけで、大きなニュースが二つあった。一つは、E組の牧島晃氏が、松本深志高教頭・阿南高校長を経て、この四月に飯田高校第三十四代校長に着任したことだ。高校当時と変わらぬ柔和な写真と「学校長挨拶」が飯田高校HPに掲載されている。

もう一つは、「稲穂」第七号の表紙を飾った彫刻家南島隆氏（A組）の個展が、六月八日から銀座で開かれ、同級生や同期生が訪れた。十五日からの「南信州交流アート展in渋谷」にも出展している。

一九七五年度卒「高二十八回」（別名「鉄人の会」？）は、今年で卒業四十周年を迎える。今夏飯田で記念同期会が予定されており、多数の同期生との再会が期待できる。

（濱島靖子記）

『稲穂』協賛金のお願い

『稲穂』発行に際して、皆さまからの協賛広告により、編集制作経費に充てさせていただいております。

この『稲穂』を同窓会広報誌として存続させるために、皆さまからのご支援を〈協賛金〉という形でお願いしております。編集委員までお申し出ください。

原稿を募集しています

在京飯田高校同窓会の各同期会からの原稿をお寄せください。同期会の開催から、同窓会のトピックスなど、どんな話題でもけっこうです。各種の発表会、個展、出版物などのご報告でもけっこうです。稲穂編集部まで。

編集会議に参加しませんか

月1回の定例会で、企画案、執筆者などを決めています。会議の後は、故郷南信州の話題など、酒と肴の簡単な食事会を楽しみながらの談論風発、首都圏と南信州を結ぶ、各種交流について話題が盛りあがります。編集や企画に興味のある方、一度、編集会議に足を運んでみてください。歓迎します。会議は1月から7月まで。

電話＝03・3352・5768